

日本音楽教育学会ニュースレター 第73号

目 次

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第49回大会のご案内（第2報） 小川 容子 2

2 委員会からのお知らせ

1. 編集委員会からのお知らせ 水戸 博道 4
 2. 国際交流に資する企画の支援について 坪能由紀子 4
 3. 日本音楽教育学会設立50周年記念出版
 『音楽教育研究ハンドブック』公募原稿応募について 加藤富美子 4

3 音楽教育の窓

1. 〈連載〉音楽・教育・学校（17）
 目指してきたこと 熊木眞見子 5
 2. ISME 2018 in BAKU 報告 6
 1) ISME 制度改革による日本音楽教育学会との関わり 村尾 忠廣 6
 2) 第33回 ISME 世界大会（AZERBAIJAN）報告 市川 恵・伊原小百合 7
 3) ISME のポスター発表を終えて 田村にしき 7
 4) ISME 世界大会に初めて参加して 神野由布樹 7
 5) バクー（風の街）の熱い風 菅野 道雄 8
 3. 日本カリキュラム学会第29回大会参加報告—教科の「見方・考え方」とは？—... 笹野恵理子 9

4 会員の声

1. 規定と本分—音楽教師の仕事とは— 石原 慎司 10
 2. 「分けない分け方」をどう実践する？ 尾崎 祐司 11
 3. 幼児の音楽教育と教員養成 福島さやか 11
 4. 子どもの文化資本と音楽的経験 清水久莉子 12
 5. フレッシュな気持ちで、一歩ずつ 熊坂 好孝 12
 6. ヒューマンビートボックスが教科書で取り上げられる日を目指して 河本 洋一 13
 7. 会員の新刊・近刊等紹介 13

5 報告

1. 平成30年度第2回常任理事会 14

6 事務局より

[編集後記]

1 学会からのお知らせ

1 日本音楽教育学会第49回大会（10月6-7日 於：岡山大学）のご案内（第2報）

大会実行委員会委員長 小川 容子

1. 口頭発表・ポスター発表・共同企画・プロジェクト研究

- ・口頭発表 79 件、ポスター発表 58 件、共同企画 11 件のエントリーがありました。たくさんのエントリーをしていただき、ありがとうございました。
- ・ポスター発表は、両日おこなわれます。1日目は 11:30 から、2日目は 12:45 からです。
- ・プロジェクト研究は、「学校と社会を結ぶ音楽教育」（2年目）です。初日の午後に予定しております。

2. 大会実行委員会企画

お二人の基調講演（地球物理学・臓器移植）と、それを踏まえたシンポジウムを予定しております。分野や領域の垣根をこえて、専門性とは何か、専門性をどう考え、教育に結びつけるのか意見交換をいたします。初日の午後に予定しております。

3. JR 岡山駅から岡山大学へのアクセス

西口と東口のどちらからでも、岡山大学に行くことができます。西口から直行 15 分、東口からのバスは繁華街・天満屋経由で 20 分前後かかります。

岡山駅西口のバスロータリー

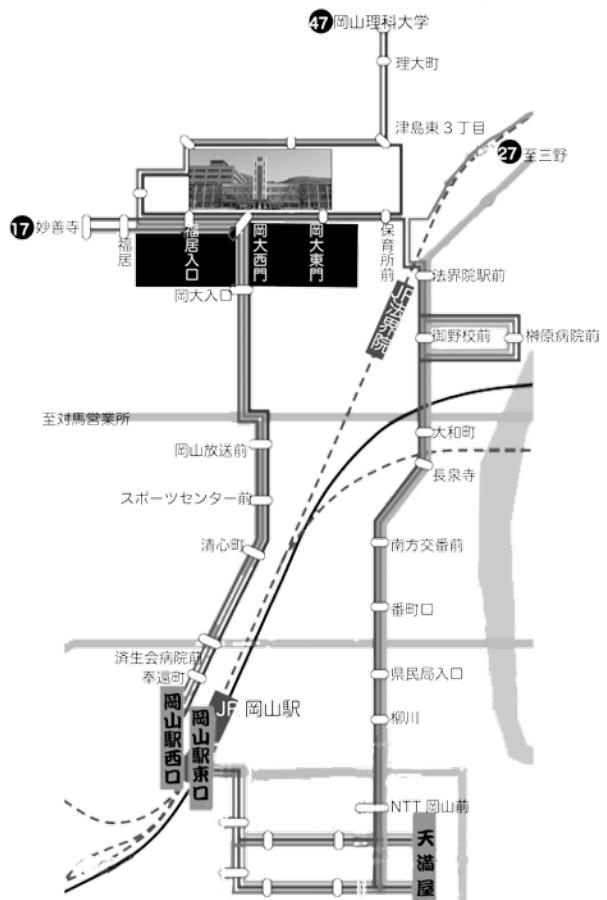


西口からは『22番のりば』から【47】系統「岡山理科大学」行きに乗車、「岡大西門」で下車してください。

岡山駅東口のバスロータリー



東口からは、『13番のりば』から【17】【67】系統「妙善寺」行きに乗車、「保育所前」あるいは「岡大東門」で下車してください。

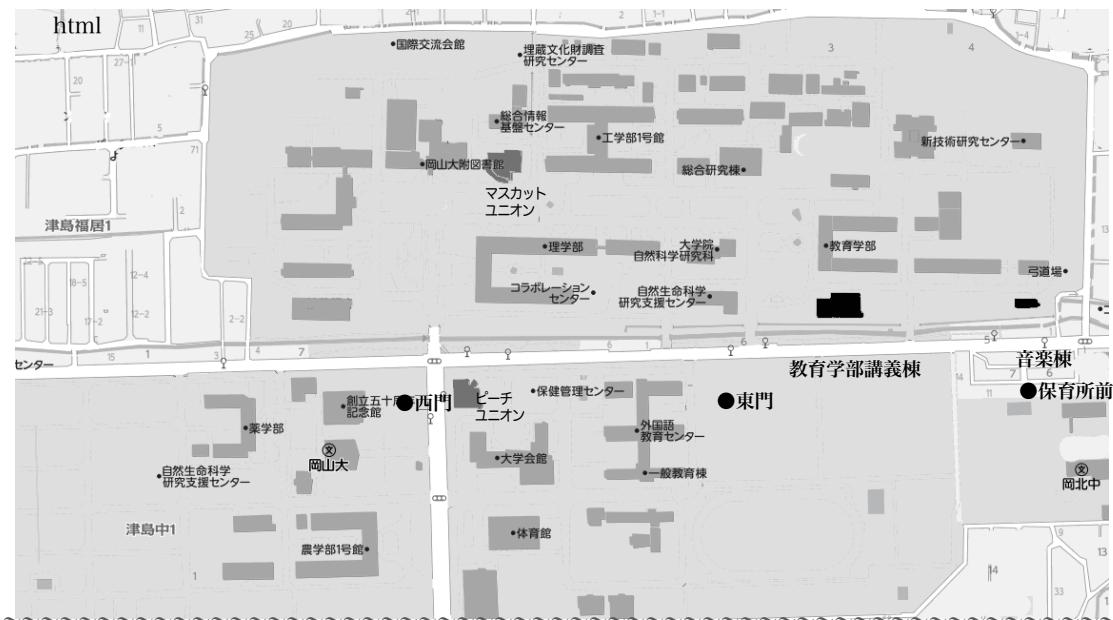


バス路線図 <http://www.okayama-kido.co.jp/bus/rosen.html>

* タクシー利用：西口からが便利です（約7～10分）。岡山市内には大学キャンパスや大学病院が点在しています。ご利用の際は、行き先を「岡山大学津島キャンパス、教育学部、東門ゲート」と必ずお伝えください。（両備タクシー：086-262-3939）

4. 大会会場（津島地区キャンパス）建物配置図

教育学部講義棟と音楽棟がメイン会場（■）になります。<http://www.okayama-u.ac.jp/index.html>



キャンパスは、フラットな敷地が広がっています。バス停「岡大西門」からメイン会場まで、徒歩15分程度です。移動の際は所要時間をゆとりをもって見積もってください。

食堂は、西門南東のピーチユニオンと、西門北北東のマスカットユニオンの2箇所がありますが、メイン会場から徒歩15～20分かかります。岡山駅付近のコンビニ等のご利用をお勧めします。

5. 院生フォーラム・ポスター発表のご案内

第1報で「院生フォーラム リニューアルします！」をご紹介後、たくさんのお問い合わせをいただきました。ありがとうございました。

フォーラムのテーマは「院生のキャリアパスを考える」です。音楽教育を専攻する院生が、研究や教育実践を通して、どのように必要な力を身に付け、それぞれの道を拓き、キャリアを積んでいくかを考えていきたいと思います。課題や直面している問題、不安や悩み等を共有し、意見・情報交換や交流を通して展望を拓いていきましょう。

具体的な流れとしては、課程等の別で4つのグループを作り、グループ毎に意見・情報交換を行い、最後に全体で共有します。冒頭では趣旨説明を行い、各グループでの検討課題も提示します。その上で各自参加したいグループに加わってください。事前申込等の手続きはありませんので、気軽にご参加ください。大学院生（博士課程、修士課程、専門職学位課程（教職大学院）等）が対象であることはもちろんですが、オブザーバーとして広く会員のご参加も歓迎いたします。途中の出入りも可能です。当日の進行やグループの取りまとめは、大会担当地区の院生が担当します。全国の院生のみなさんが多数ご参加くださり、リニューアル最初のフォーラムが大いに盛り上がりますよう、応援、ご協力をよろしくお願いいたします。ご質問、お問い合わせ等がございましたら、大会実行委員（院生フォーラム担当）藤井浩基（kofujii@edu.shimane-u.ac.jp）までお願ひいたします。院生フォーラムは、2日目の12:00から予定しております。皆様にとって実り多い大会になるよう、大会実行委員会一同、銳意準備中です。

2 委員会からのお知らせ

1 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 水戸 博道

第2回編集委員会（5月13日開催）では、投稿原稿の採否について審議を行い、次の通り決定しました。『音楽教育学』に投稿され、再査読となっていた研究論文2本のうち、1本が採択、1本が不採択となりました。また、新規投稿の研究論文2本については、1本が採択、1本が再査読となりました。『音楽教育実践ジャーナル』へは、特集に10本、自由投稿に7本の投稿があり、特集は5本が採択され、自由投稿は4本が採択されました。

『音楽教育実践ジャーナル』通巻30号(2019年12月発行)の特集テーマ

次号の特集テーマは、「音楽科教員の養成・採用・研修—その現状と課題—」となりました。多くの原稿の応募をお待ちしております。また、テーマにかかわらず、自由投稿も歓迎いたします。

次回『音楽教育学』投稿締切

『音楽教育学』の直近の締め切りは11月15日となっております。できるだけ多くの方の投稿をお待ちしております(2019年8月発行の『音楽教育学』49-1号への掲載をめざします)。

2 国際交流に資する企画の支援について

国際交流委員長 坪能 由紀子

音楽教育研究・実践の国際交流に資する企画を支援するための内規が、理事会で決定されました。

2018年度については、10月1日から3月31日までの間に開催される企画を対象として、支援の希望申請を受け付けています。申請の締め切りは2018年8月15日です。今年度からの開始ですので、今年度に限って審査スケジュールを短縮し、受理された申請は理事会で審査したのち、9月中旬ごろまでに支援の可否を決定してお知らせします。詳細はホームページに掲載された「国際企画」(トップページ→学会概要)をご覧ください。

2019年度からの企画についても、支援希望申請の受付を開始しています(2019年1月末日締切)。詳細はホームページに掲載された「国際企画の後援と共催に関する内規」(トップページ→学会概要)をご覧ください。

これから外国の研究者、実践者との交流を計画していらっしゃる方々に対して、当学会が少しでもお役に立てればと思います。ふるってご応募ください。

3 日本音楽教育学会設立50周年記念出版

『音楽教育研究ハンドブック』公募原稿応募について

設立50周年記念出版編集委員長 加藤 富美子

『音楽教育研究ハンドブック』の実践研究に関わる項目の原稿公募(2018年5月31日締切)では予想をはるかに上回る多数の応募をいただき、誠にありがとうございました。16項目の公募に合計で86本の応募をいただき、いずれも『ハンドブック』に書いていただきたい内容でしたが、誌面の都合上、編集委員会で厳正なる審査を行い規定の本数に絞らせていただきました。

このたび残念ながら採択できなかった原稿にも、音楽教育研究として重要な内容がたくさん含まれており、今後、研究を発展していただき学会誌等で発表されることを期待いたしております。

3 音楽教育の窓

〈連載〉音楽・教育・学校（17）

1 目指してきたこと

熊木 真見子（育英大学）

もう30年以上も前のことです。教員になったばかりの私は、その地区の音楽専科教員の集まりで、先輩の先生方にこう言われました。「あなたは何をがんばるつもりなの？合唱？合奏？吹奏楽？鼓笛？その中のどれかひとつに決めて、それをひたすらがんばらなきやだめよ」。驚きました。どれかひとつに決めるなんて、そんな偏った音楽教育でよいのでしょうか。

私は大学で学んだオルフの音楽教育に興味をもち、ザルツブルグのオルフ研究所の講習を受けた経験があります。そこでは世界中から集まった様々な国の人々と音楽を通してかかわることができました。研究所の庭から拾ってきた枝や葉を大きな紙の上に好きなように並べ、それを図形楽譜ととらえて演奏したり、意味不明の言葉を作つて重ねたり動きをつけたりして作品にするなど、それまで経験したことのない活動が多く、とても新鮮で楽しいと感じました。こういう活動を日本の子どもたちにも経験させたいと思っていましたから、「どれかひとつに決めて」と言われたことに戸惑いました。「あんまり自由にやってはいけないんだな」と感じました。

そこで、最初のうちは教科書通り、指導書通りの授業を行っていました。しかし私の指導力不足のせいか、子どもたちが楽しそうではありません。このままではいけないと思い、どうしたら子どもたちが笑顔になるか、いろいろ工夫するようになりました。自分のアイディアだけでは限界がありますから、ワークショップにも積極的に参加して、まず私自身が様々な活動を体験するようにしました。その体験が新たなアイディアのヒントになるからです。

子どもたちが喜んで取り組んだ活動のひとつに、ボディパーカッション（その当時は手足拍子と言っていました）を用いたリズムアンサンブルがあります。そこで、その地域の連合音楽会で、オルフのリズムアンサンブルに子どもたちが創作した部分を加えた作品を演奏しました。演奏が終わると客席の他校の子どもたちが一齊に真似をして、手を打ったり足踏みをしたりし始めました。その様子を見て、校長も担任も大喜びでした。ところが音楽専科の先生方の反応は全く異なっていました。私に対してよそよそしいのです。なぜだかわかりませんでした。

しかし翌月の音楽専科教員の集まりで、その理由がわかりました。その当時合奏の大家と言われていた先生が、講師として連合音楽会の各校の演奏を批評されたのですが、私の学校の演奏に対して、怒りを含んだ声で「これは音楽じゃない」とおっしゃったのです。「旋律もなく楽器も使わず体の音だけなんて許せない。フラメンコでもないのに」。周りの先生方も頷いていました。呆然としました。「では、どうすればよかつたのだろう…」。何度も何度も考えましたが、私の気持ちは変わりませんでした。「私はやはり、子どもたちが背伸びをして高度な演奏技術を身に着けることを目指すよりも、子ども自身が喜んで取り組む中で、音楽への視野を広げ、表現力を伸ばしていくようにすることを目指そう」と、あらためて思つたのです。

それから三十年。何年積み重ねても、授業とは難しいものです。相手が小学生から大学生になりましたが、難しいことに変わりはありません。悩み続ける毎日です。

ここまで多くの方に支えられてきましたが、小学校教師としてとくに影響を受けたのは、清水和先生です。ともすれば見栄えよくまとめたがる私を「教師にとってではなく、子どもにとって価値のあることかどうか」という視点に常に引き戻してくださいました。さて、微力ながら今度は私が、そのような視点をもった若い先生方を育てなければと思っています。

2 ISME 2018 in BAKU 報告

本学会が団体会員である ISME の第 33 回世界大会が 7 月 16 日～20 日にアゼルバイジャンの首都バクーで開催された。50 か国から 600 名が参加、その中日本人参加者は 25 名であった。ちなみにアゼルバイジャン在住の日本人は 50 名なので、この間 150% の人口増を見たことになる。

今回の ISME、組織問題とも絡んで本学会では「特命理事」の任命が行われている。ここでは組織問題も含めて 6 名の会員にそれぞれの視点から報告をお願いした。 (広報委員長：奥 忍)

1) ISME 制度改革による日本音楽教育学会との関わり 村尾 忠廣 (国際涉外特命理事)

総会では、ISME の会則 (Constitution) と細則 (Bylaws) の改正案が提案され、承認されました。何と 60 年ぶりの改正です。会則等の見直しは、2014 年のブラジル大会で提案され、Gary McPherson を委員長に歴代の会長、理事など 10 名の委員による検討委員会で慎重に議論されておりました。以来、4 年目を経ての提案ということですから、改正にはいろいろ難しい問題があつたのでしょう。いずれにせよ、今回の改正案の承認で ISME がようやく抜本的な改革にこぎつけたことになります。改正内容の内、特に重要であるのは、ISME の各支部 (ISME National Affiliate) の廃止とそれに代わるパートナーシップ学会の制度 (Professional Partnership Group Member) を設けたことです。この改正は ISME と日本音楽教育学会との新たな関係に発展してきますので、少し詳しく説明しておきましょう。

これまでの ISME の規定では、各国ごとに ISME の支部となる INA (ISME National Affiliate) が置かれ、それは 1 国 1 団体に限られていましたから、日本の場合、INA は全日本音楽教育研究会となっていました。そのため日本音楽教育学会が INA に参入することはできなかったのです。新しい Partnership Group Member は、企業や学校のようなグループ会員とは別に学会のような専門家団体をパートナーとするもので、1 国 1 団体という制約はありません。また、従来のグループ会員というのではなく、INA がそうであったように、国内活動報告や共同企画などの義務を伴った Partnership 学会ということになります。G. McPherson から「改正案が承認されたら、日本音楽教育学会が Professional Partnership 学会となるよう申請してはどうか」という案内をいただきました。が、新しい制度が整備され、機能するためには時間を要します。改正案が承認されてから申請するとなると、どんなに早くても実現は 2 年先になってしまうことでしょう。そのため、国際涉外特命理事として私が一計を案じました。それは、改正前に INA に加入申請し、改正後はそれを Partnership 会員への申請として読み替えていただく、ということです。INA ならば手続きも明記されていますから、総会前に申請することができます。この案は、日本音楽教育学会理事会の賛同を得られましたので、4 月早々今川会長、今田事務局長名で ISME に申請書を送っておりました。

Partnership 団体会員への読み替えについては、松信前 ISME 理事から ISME 事務局長 Angela Ruggies に伝えていただきました。松信理事の感触では、事務局長はその方向で進めてくださるようです。ただし、既存の INA が自動的に Partnership 会員になれるかどうか、という問題も絡んできますから、回答には少し時間がかかるかもしれません。いずれにせよ、日本音楽教育学会が ISME Partnership 学会として承認を得られることはまず間違いないでしょう。

INA の廃止は、1 国 1 票に代わって 1 人 1 票という投票システムへの変更を伴います。それだけに ISME 発足以来の大改革です。ISME は大きな舵を切り、新たな一步を踏み出しました。日本音楽教育学会もその一步を共有することになるでしょう。国際化への新たな展開の始まりです。

2) 第33回 ISME 世界大会 (AZERBAIJAN) 報告

市川 恵 (早稲田大学)
伊原 小百合 (東京藝術大学)

日本から乗り継ぎ一回、フライト15時間以上かけて辿り着いたヘイダルアリエフ国際空港は、ザハ・ハディッド氏による現代的なガラス張りの空港です。そこからバスに乗ること30分、ペルシャ語で「風の吹く街」を意味するバクーは、カスピ海の西側に面しており、高層ビルの立ち並ぶ近代的な姿と、石畳みや褐色のレンガ造りの建物が並ぶ旧市街が共存する街でした。

大会プログラムによると、3本の基調講演、17本のシンポジウム、296本の口頭発表、76本のワークショップ、98本のポスター発表が行われました。また、ジャズ演奏、管弦アンサンブル等のパフォーマンス発表も充実していました。日本からは25名の参加者が集い、盛んに研究発表がなされました。

初日のAhmad Sarmast氏による基調講演では、アフガニスタンの音楽教育についての発表があり、戦争が絶えない地域における音楽のもつ意味を考える機会となりました。また、オープニングセレモニーでは、アゼルバイジャンの作曲家によるオーケストラ作品や華やかな舞踊が披露され大変な盛り上がりを見せました。2日目のナショナルミーティングでは、1970年代より参加されている村尾忠廣先生よりISMEの歴史やAPSMER発足の経緯など大変貴重なお話を伺うことができました。見知らぬ土地での学会発表は、大変緊張しましたが、諸先生、先輩方の温かいお励ましお陰で有意義な経験となりました。そして、世界各国の同世代の研究者たちが活発に発表し、フロアと意見を交わしあう姿に大変刺激を受けました。

3) ISME のポスター発表を終えて

田村 にしき (東京福祉大学)

私は、ポスターで、小学生を対象とした能の学習プログラムを実施した際の教育効果について発表しました。アメリカ、オーストラリア、インドなど、世界各国の研究者が立ち止まり、発表を聞いてくださいました。日本の伝統音楽を始め、能を観たことがある方は9人のうち2人程度でしたが、児童が謡に合わせて大鼓、小鼓を打っている映像をパソコンで見せながら、授業の内容、日本の伝統的な伝承方法も大切にしながら教えていること、児童の変容等について説明しました。能を観劇したことがある方でも、子ども達が生き生きと学んでいる様子には驚いていました。また、能は舞台芸術ですが、地域によって結婚式などで小謡がうたわれていたことに驚く方もいました。以前参加したAPSMERでは、ポスター発表を見に来られたアジアの研究者の関心は自国の音楽をどのように教えているかに寄せられ、指導法について話し合いました。一方、今回のISMEでは、子どもが学習した後の心理的な変化や声の変化などに関心があったようです。

国際大会に参加すると、世界各国の研究者がどのようなことを大切にして研究しているのか、また、自分自身の研究のどのような点に関心をもってくださるのかを、感じ取ることができます。今後も、日本の研究者として、日本の伝統音楽の教育について国際的な場で発表したり、また国際的な視点から比較したり、見直したりすることを続けていきたいと思いました。

4) ISME 世界大会に初めて参加して

神野 由布樹 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)

この度、初めてISME世界大会に参加してまいりました。発表の際は、大変緊張しましたが、結

果的に、将来の共同研究者になりうる方々とお会いし、次回に向けて、新たな目標設定ができました。私は、音楽科における多文化教育実践に研究上の関心があります。今回のポスター発表では、中国の音楽の実践について、口頭発表では、ガムランの実践に関して発表いたしました。発表前は、質問にうまく答えられるか等、不安なことばかりでした。しかしながら、実際は想定を超えた多くの方が発表会場にお越しくださいり、うなずいたり、笑顔で聞いてくださったりと、私の拙い発表を理解しようと努めてくださいました。その後いただいたご質問も、私が発表した取り組みの重要さを認めてくださったうえで、「それが子ども達に今後どのようなインパクトを与えるのか」等の、これから音楽科をともにより良いものにしようとする前向きなものでした。自分と同じ研究関心を持つておられる方の存在に気づいたことは、今後の研究に取り組むうえでの励みとなるに違いありません。

また、本大会を通して、日本を含めたアジアの研究者の方々のご活躍を拝見しました。私も、子どもたちのために、国境を超えた研究者の方とも協働して、よりよい音楽科教育について考えを深められるよう力をつけたいと、決意を新たにする良い機会となりました。

5) バクー（風の街）の熱い風 菅野 道雄（東海学院大学）

長年行きたい行きたいと思い続けてきたISME世界大会への参加、今回こそと思い切って仕事をやりくりし、ようやく実現することが出来ました。同僚たちからは異口同音に「それどこ？」と聞かれたアゼルバイジャンのバクーに、胸をふくらませて向かいました。

最初に受付で、トルコ絨毯風の織物の素敵なショルダーポーチを頂きとても嬉しくなりました。オープニング・コンサートでは、ショパンやプッチーニに加え、男性は力強く、女性はまるで浮いているかのように見える滑らかな動きの民族舞踊に圧倒され、またいくつかのアゼルバイジャンの現代音楽（わかりやすい音楽の方向性は旧ソ連時代の影響なのでしょうか）も聴くことができました。様々な文化が交錯するこの国でも、ISMEは新たな音楽教育変革への契機となるのでしょう。

世界各国の研究者たちによる発表やワークショップが数多く複数会場で同時進行で行われるため、どれに参加するのかに迷います。必然的に、会場ごとの参加者の数はあまり多くならず、発表者と聴衆の距離を感じない一体感がありました。発表後も、ホテル内で話したり（メイン会場がヒルトン・ホテルだったこともあります）、メールでやり取りしたりと、発表内容が更に深められ充実していくこととなりました。そこには、異なる国のそれぞれが、理解してもらおう、理解しようと思う気持ちが、同じ國の人同士よりも強まることがあったように思います。これこそ国際大会の楽しさなのだと感じました。



{写真1}ISME2018 のプログラム

伝統楽器と古代のレリーフとゾロアスター教に由来する炎をイメージした超現代的な建造群がカスピ海に映り込んでいる。



{写真2} ISME2018 会議バッグ

伝統的な織物素材。街行く男性が肩からかけていてもキュートで目を惹く。

3 日本カリキュラム学会第29回大会参加報告—教科の「見方・考え方」とは?—

笹野 恵理子（立命館大学）

6月30日、7月1日にかけて、北海道教育大学旭川校で日本カリキュラム学会第29回大会が開催された。この学会は、音楽教育学会の会員も多く所属している学会の一つである。前年度の岡山大会は、「新学習指導要領大会」と言われたほど、新学習指導要領について活発な討議がなされたが、旭川の地でも引き続き新学習指導要について白熱した議論が交わされた。ここでは、音楽教育研究の関心の文脈から、新学習指導要領の改訂を受けて設定された「課題研究III」をとりあげて報告したい。

『見方・考え方』をどうとらえるか—資質・能力の育成と教科の本質の追求とをつなぐーと題された同課題研究では、はじめにカリキュラム研究の立場から、西岡加名恵氏（京都大学）が、「逆向き設計」論（G. ウィギンズ & J. マクタイ）を踏まえた検討を行った。「見方・考え方」とは、西岡氏によれば、新学習指導要領改訂に際して、「主体的・対話的で深い学び」を通して、「資質・能力」を育成する方針が打ち出されたが、一方で教科内容を保障できるのかという疑問の声も聞かれた。そのような問題を克服するため重視されているのが、「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」、いわゆる「見方・考え方」を育てることである、と説明されている。

西岡氏は、中央教育審議会に先だって設置された「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」（以下「検討会」）の「論的整理」（2014年）において、「見方・考え方」は、教科の「本質的な問い合わせ」に対応するものとして位置づけられていたのに対し、中教審の議論過程において解釈し直されたことについて課題を指摘した。氏によれば、「論点整理」では、「エネルギーとは何か。どのような性質を持っているのか」といった「教科等の本質に関わる問い合わせのためのものの見方・考え方」という説明がなされていたのであり、このような「検討会」の提案の背景には、「逆向き設計論」（G. ウィギンズ & J. マクタイ、西岡訳[2012]『理解をもたらすカリキュラム設計』日本標準）の考え方があったという。「逆向き設計」論の詳細についてここで触れることはできないが、中教審における議論過程で「見方・考え方」という言葉が解釈し直されたことによって、「逆向き設計」論が重視する（教科の）「深い理解」の保障という発想は後退し、「見方・考え方を働きながら、知識を相互に関連付けてより深く理解〔する〕」（新学習指導要領）とあることから、スキルに傾倒して定義し直されたことの問題を氏は指摘した。

続いて、社会科教育の立場から草原和博氏（広島大学）、国語科教育の立場から阿部昇氏（秋田大学）が報告を行った。草原氏が「社会科では『教科の見方・考え方』はなじみある議論である」と述べたのに対し、阿部氏は、「国語科が担わされてきた役割から、国語科では『見方・考え方』の議論はほとんどなされてこなかった」と述べた。教科成立の経緯から、両者ではまったく異なる文脈の議論が存在し、教科固有の考え方や相違が浮き彫りになって、実に刺激的な議論で会場内は熱気を帯びた。「どのように書けば／読めば／話し合えばよいのか」「社会はどのように形成され、どのような要因で変わっていくのか」といった教科の本質的な問い合わせに答える「見方・考え方」とは、教科固有の文脈に深く根差したものである。昨今の教員養成教育や大学院政策にみられる、ともすれば冷遇視され弱体化が危惧される教科教育学の必要性を実感した一場面であった。

音楽科のものも包括的な本質的な「問い合わせ」とは何か。その「問い合わせ」に答えるための「見方・考え方」とは何か。子ども自身が音楽科の本質的な「問い合わせ」を問える力を身に付けるにはどうしたらよいのか。音楽教育研究でしか問うことができないこれらの課題について、議論を深めつつ、来年30回大会の議論の展開を期待したい。

4 会員の声

1 規定と本分—音楽教師の仕事とは—

石原 慎司（秋田大学）

これまでに私はいくつかの校種で音楽の授業を行ってきた。中学校、高等学校、高等特別支援学校、短期大学、大学である。現在は大学の教員養成課程で音楽科教育や指揮法などを担当しているのだが、昨年度末、教員免許法改正に伴うシラバス作成において、教職課程コアカリキュラムに対応させながら授業を考え、また、振り返る機会があった。このコアカリキュラムは教員養成課程で教えるべき全ての項目が細分化されて表に示されており、いずれかの必修科目をもって各項目が達成できればいいことになっている。この項目は、自動車教習所の教官に印を受ける台紙に記載されている「運転技術の各項目」と言えばイメージしやすいだろうか。

さて、自動車の運転しかりだが、実際の学校教員の業務というのは、そういった台紙にある項目だけでは不十分である。勿論、文部科学省もコアカリキュラムについては「地域や学校現場のニーズや大学の自主性や独自性」を尊重する旨述べているように、付加的な「何か」が期待されている。コアカリキュラムの各項目が最低限のものである以上、付加的な何かの中身の方がより大切な部分と言えるかもしれない。この規定外の「不文律領域」こそが、各大学、各授業担当者にとっては評価外だが実は最も責任の重い部分なのではないかと私は思うのである。

音楽教師の規定外の不文律領域の仕事としては、例えば私がある中学校に着任した時、吹奏楽部員が5名しかいなかつたので、すぐさま部員募集に力を注ぎ、30名まで増員することに成功し、初心者多数ではあったがその夏の吹奏楽コンクールに出場させたことがある。この結果、今日まで途切れることなく20年間出場し続けることになった。これは業務というよりは音楽教師としての本分に基づく行動だったであろう。かなりの力技であり、先輩部員が5名なので顧問たる私がかなり忙しくなるのは自明である。1年任期の期限付講師に求められていた業務を超えていたとも思う。しかし、どうしてもこの部活をなんとかしてやりたいという思いが先に立ったのである。

また、昨年の当学会誌に報告したように、全校生徒数70名に満たない小規模高校では、授業を中心にしてNHK全国学校音楽コンクールに出場し続けたことがあった。この取り組みは着任の翌年度から離任までの7年度間行ったが、部活動ではないため指導者である私に掛かる負担はかなりのものであった。音楽指導だけでなく集団のとりまとめや運営面を一人で背負うことになるからであるが、地方郡部の生徒たちに対して私のできる最上の教育はこれだとの確信に支えられて続けた取り組みであった。

さて、大学関係の仕事をするようになって数年が経ち、勤務している大学宛にかつて在職していた小規模高校から手紙が届いた。今年の10月に閉校式があるとの知らせであった。私は高校在職当時、「Nコンに出たことは一生忘れない経験になるはずだ」と生徒たちに言っていたが、自分の教育がどうであったか、豊かな情操の教育に寄与し得たのかどうか出席して確認してこようと思う。そして同月、私が発起人として年度単位で有志を募って編成している大学祭オーケストラの4度目の指揮をする。勤務大学には学生オーケストラがなく、教育上「何かが足らない」と直感的に思い、着任年度すぐさま立ち上げたのである。ここでは全学部の学生が交流しながら音楽する場となっており、音楽系学生のみならず、多様な学生の学びの場となっている。正規の部活ではない臨時団体であるため、この企画の維持には相当な手間が掛かる。しかし、誰に求められるでもなくこれは続けられる限りは続けなければ、との责任感で何とか続けている。

2 「分けない分け方」をどう実践する？

尾崎 祐司（上越教育大学）

2007年4月の学校教育法改正によって特別支援教育が規定され、小中高等学校を含めたすべての校種で教育の見直しがなされました。そのきっかけとなったのが、「障害者の権利に関する条約」（2007年9月署名、2014年1月締結）です。署名から締結に至るまでの間、国内法の整備について議論され、特に教育に関しては学習保障の観点から様々な議論がなされました。現行の学習指導要領から「交流及び共同学習」という学習形態の名称が明記され、発達障害のある子どもにとって、①分かりやすい考え方、②内面を表出する多様な手段、③学ぶ意味が分かりやすい教材の提供、というユニバーサル・デザイン・ラーニング（UDL）の考え方が着目されてきました。

しかし、これまで「一般の学校」と「特殊教育」、「通常の学級」と「特殊学級」と分けて考えてきた人々の概念が変わるにはもう少し時間がかかりそうだと感じています。例えば、私は石川県の中学校音楽科の教員として採用されました。初任校が養護学校（当時）だったのですが、初任者研修時のあるグループ分けでは「音楽科教員」としてではなく「養護学校の教員」と校種で区分されていた記憶があります。このような認識は、学会などの学術団体でも同様で、音楽の授業研究の発表であっても対象の子どもが特別支援学校の児童生徒であると「特別支援教育の研究」とカテゴライズされ、本来の「音楽科教育の研究」とは「少し違うもの」と分けて考えられている印象があります。私が言いたいのは分けることの良否を問題としているのではなく、UDLの考え方を踏襲すると今後はこれまでのように分けて認識する中に、音楽科の学びの概念については連続的に捉える「分けない分け方」が求められるのではないかということです。

音楽科の授業は国立特別支援教育総合研究所の調査によると、知的障害のある子どもを含む「交流及び共同学習」の実施率が88.4%と最も高い教科・領域という報告があります。しかし、単に一緒に活動する場面を得やすいか、という物理的な側面よりも学びの質的な深まりを期待するとなると、一人一人の教師による「子ども」の捉え方が授業に大きな影響を及ぼすと考えられます。担当される子どもの特性を丁寧に捉えた「分けない分け方」の実践を期待したいと思っています。

3 幼児の音楽教育と教員養成

福島 さやか（福岡女学院大学）

各地で夏祭り、夕涼み会などが開催される時期となりました。保育所、幼稚園などでも、音頭を踊る、灯籠を制作して飾る、和太鼓の演奏など、さまざまな活動が行われています。

教員養成に携わるようになり、約10年が経過しました。研究会への出席、視察などをとおして、幼児教育に関し、健康、人間関係、環境、言葉、表現の5領域が相互に密接に関連していることを改めて感じています。子どもたちは例えば、ままごと遊びのなかで、友だちと一緒に話をしながら、摘んできた植物を耳元にもついていき振って植物の音を楽しむ、ブランコのリズムを楽しむ、行事において、異年齢クラスで皆と一緒に歌を歌うことを楽しむなど、色々な経験をしながら過ごしています。また園で習った歌を、家に帰った後も、歌っている子どももいることでしょう。それぞれの領域のもつ意味や内容をより深く、具体的に検討した上で、音楽教育を考えていく必要性についても改めて考えております。

最近では卒業生と関わるなかで、教育実践に対する教員の想いや、実践の内容と大学における教

育との関連性などについて考えることも多くなりました。卒業生と話をしているなかで、子どもたちと一緒に活動する楽しさ、子どもたちの成長に寄り添える嬉しさ、子どもの学びをより深めていきたいという願い、音楽をとおして子どもと関わることができる喜びなどが、強く伝わってくることがあります。私自身も、教員養成に携わるようになった当初のことを振り返りながら、また気持ちを新たに研鑽を積んでいきたいと思っております。

4 子どもの文化資本と音楽的経験

清水 久莉子（新入会・滋賀大学大学院）

私は現在、ドイツにおける文化格差を縮減する取り組みとしての音楽教育プロジェクト「JeKi」に関心を持っています。この取り組みを知ることで、日本国内における同様の状況に大きく寄与するのではないかと期待しているためです。

JeKi 「Jedem Kind ein Instrument（どの子どもにもひとつの楽器を）」では、2年間で一つの楽器を練習し、アンサンブルができるようになるまで支援されます。そこでは、家庭の文化資本に恵まれない子どもが多く通う学校を対象とし、学校教師に加えて、地域の音楽学校教師や演奏家からも指導がなされ、楽器を学ぶ環境を醸成しています。このプロジェクトはますます広がりを見せており、初等教育段階のみならず、中等教育段階でも今後行おうという議論がなされています。

家庭の文化的な背景に左右されがちな子ども時代の音楽的経験に対し、どのような取り組みができるのかについて、このプロジェクトから、日本の音楽教育に一つの視座を得られるのではと考えています。さらに、理念だけにとどまらず実際を知るべく、今秋よりフィールド調査を行い、子どもと保護者の音楽的経験が異なることによってもたらされる影響についても、理解を深めていきます。

5 フレッシュな気持ちで、一步ずつ

熊坂 好孝（再入会・ヤマハ音楽振興会 音楽研究所）

実は、私は本学会に入会するのがこれで2回目になります。というのは、15年前、ヤマハ音楽振興会音楽研究所に在籍し、当時「子どもの声域」を中心に研究を行いました。そこで本学会に1度目の入会をし、本学会前会長 小川容子先生よりお声掛けいただき、2002年の「くらしきゼミナール」、2005年の「妙高ゼミナール」でのラウンドテーブルに参加、発表させていただきました。そこでは非常に多くの勉強をさせていただき、今でも心より感謝しております。私自身、その後、ヤマハの中で、別セクションでの業務を担当することとなり、一旦本学会を退会。それから10年以上経過した2016年、再び音楽研究所での業務に戻り、昨年より、また「子どもの歌声」の研究を担当することとなり、2回目の本学会入会となつたわけです。このような経過をたどり、あらためて日本音楽教育学会との深いご縁を実感します。

研究を進めていく上で、特に音楽教室の子どもたちを対象とした調査では、本人たちはもとより、保護者の方々、担当の先生方には、多大なご理解、ご協力をいただくこととなります。そのご厚意を最大限活かし、何よりも、今後、子どもたちが、心から楽しく、一層いきいきと音楽活動に取り組めることにつながることを常に目指して、研究を進めてまいりたいと考えております。これから、また皆さまには大変お世話になりますが、フレッシュな気持ちで1歩ずつ勉強してまいりたいと思います。どうかご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

6 ヒューマンビートボックスが教科書で取り上げられる日を目指して

河本 洋一（再入会・札幌国際大学短期大学部）

“いつでも、どこでも、誰でも”自ら次々に音楽を紡ぎ出していくことができ、しかも、1対1の勝負も可能な音楽表現＝ヒューマンビートボックス。この研究を始めてから6年が過ぎ、この間、科研費のテーマとしても初めて採択され、徐々にではありますが研究領域として認知していただけるようになりました。

ヒップホップ文化の音楽として、楽器の音の模倣に端を発したヒューマンビートボックスは、今では3年おきに世界大会が開催され、音楽表現の新たなジャンルとして確立しつつあります。国内ではこの音楽表現の指導を専門とするインストラクターも出現し、幼児から高齢者に至るまで、自らの身体のみで音楽を奏でる楽しさを実感しています。それは、もはや単なる楽器の模倣を越え、身体を使った独自の音楽表現に達していると言えます。

私自身はビートボクサーではありませんが、その表現の素晴らしさと音楽教育における可能性について、広く学会員の皆様にお知らせし、ひいては教科書の紙面の片隅に新たな音楽表現としてヒューマンビートボックスが取り上げられることを目指しています。

実は諸般の事情から数年前に一度本学会を退会していたのですが、研究を進めるにつれ、音楽教育におけるヒューマンビートボックスの様々な可能性を実感し、改めて本学会の重要性を再認識するに至り、再入会を認めていただきました。新たな気持ちで皆様と共に歩むべく決意を新たにしておりますので、どうぞよろしくお願いします。

7 会員の新刊・近刊等紹介

★大島俊樹、他 著『正しいドレミの歌い方—楽器がなくても楽譜は読める！』

アルテスパブリッシング 2018/4/10 A5版・180頁 ISBN978-4-86559-183-5 [本体1,800円+税]

階名（移動ド）唱法を通じ読譜力を身に付けられる教本。楽器は使用禁止。最初は五線譜なしで音感覚を育てる学習順と、可愛らしい解説イラストなどにより、初学者でも容易にソルフェージュ・楽典学習ができるようになっている。

★小畠郁男・佐野仁美・田中幹子編著『保育士、幼稚園、小学校教員養成に役立つ 豊かな演奏表現のための

ピアノ教本』 サーベル社 2018/3/30 菊倍版・144頁 ISBN 978-88371-772-9 [本体1,800円+税]

初心者からかなり進んだ人までを対象に曲を厳選し、楽典や弾き歌い曲を加え、この1冊で採用試験にも対応できるようにしました。表現曲線を用いて演奏法をわかりやすく示し、自然に豊かな表現が身に付くことを目指しています。

「ニュースレターは会員のホットな情報交換の場」の方針の下、この頁ではみなさまからの投稿をお待ちします。書籍の他、CD、DVDなどのリリースもお寄せ下さい。書誌情報、基本的な音源情報に加えて「である調」90字程度の紹介文をお願いします。

投稿先アドレス☞(半角で) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

5 報 告

1 平成 30 年度第 2 回常任理事会

日 時：2018 年 6 月 24 日（日）14:00～16:20

場 所：聖心女子大学音楽室（2号館地下）

出席者：今川、有本、今田、小川、菅、北山（記録）、佐野、島崎、坪能、寺田、本多

【会務報告】（2018 年 4 月 29 日以降）

4 月 29 日 平成 30 年度第 1 回常任理事会（聖心女子大学）、平成 30 年度第 1 回理事会（聖心女子大学）

5 月 20 日 ニュースレター第 72 号 発行

5 月 31 日 第 49 回大会発表申込締切り

6 月 24 日 平成 30 年度第 2 回常任理事会（聖心女子大学）

【審議事項】

1. 平成 30 年度補正予算について（島崎）

現在の会員数は 1,572 名（正会員 1,568 名、学生会員および特別会員 4 名）であり、2 名増加分の会費（14,000 円）は予備費に回すことになる等、前回の理事会資料からの変更点について説明があった。

2. 平成 31 年度予算について（島崎）

プロジェクト研究、国際交流基金、学会基金、50 周年記念事業等について前回の理事会資料からの変更点の説明があった。本年度の国際交流基金、50 周年記念事業関係、ワークショップ等で残額が出れば来年度の積み立てに回す予定であることや、選挙関係の資金を 20 万円に増額したこと（前回は 15 万円でやや不十分であったことから）等の補足説明があった。

3. 第 49 回大会（岡山大会）について（小川）

第 49 回岡山大会について、発表本数が口頭発表 79、ポスター発表 58、共同研究 11 と盛況であること、ポスター発表に新たな可能性を開拓しようとしていること等の説明があった。また、坪能理事よりプロジェクト研究の進捗状況について説明があった。

4. 国際企画の後援と共催等に関する内規及び今年度の実施について（今川）

国際企画の後援と共催等に関する内規の検討について経緯の説明があり、これが理事会で承認された旨の報告があった。同内規については学会ホームページで公開される予定である。今年度については 7 月から公募を開始し、10 月以降来年の 3 月末日までに開催予定の企画を 8 月 15 日締め切りとして募集することとした。

5. 新入会員及び退会者について（今田）

2018 年 6 月 18 日以降、正会員の新入会員 38 名について承認した。

2018 年 6 月 18 日現在 正会員総数 1,572 名 学生会員数 4 名 名誉会員 2 名 特別会員 2 名

【報告事項】

1. 各委員会等報告

(1) 編集委員会（小川）

5 月 13 日に行われた第 2 回編集委員会の報告があり、投稿規定の改定、査読結果の説明、編集作業の進捗状況等について報告があった。次回は 8 月 11 日に学習院大学で開催される予定。

(2) 広報委員会（菅）

ニュースレター第 73 号の発行計画について資料に基づいて説明があった。

(3) 日本音楽教育学会設立 50 周年記念出版編集委員会（今川）

50 周年ハンドブック原稿公募について、合計 86 件の応募の中から 21 件が採択され、これから完成原稿の執筆を依頼する予定である旨の報告があった。佐野委員より、『50 年の歩み』編纂委員会が 10 月 6 日に開催される予定であること、発行日を第 50 回大会の開催日とすること、同冊子は『音楽教育実践ジャーナル』に同封して送付する予定であること等の報告があった。また、掲載内容について様々な意見交換が行われた。

2. 法人化検討 WG について（今川）

本学会の法人化に関する検討 WG をスタートさせた旨の報告があった。同 WG は北山、本多、玉村の各理事と今田事務局長で構成され、基本的にメールでの検討を中心に進め、本年度末の理事会で経過報告をして次年度以降の方針を取りまとめる予定である。

3. 50 周年プレ企画について（今川）

50 周年プレ企画について検討 WG を発足した旨の報告があった。同 WG の構成メンバーは、今川会長、有本副会長、今田事務局長に加え、企画担当の小川理事、佐野理事。今年度中のイベントとしては、模擬授業をもとにした音楽科の意義の検討、芸術教科を学校で学ぶことの意味、音楽科教育によってどういう力が育まれているのか等、他教科の専門家の観点から捉えるような企画を考えている。同時に、美術科にも呼びかけている。今年度中に実施する予定であるが、詳細な日程会場については未定。

4. 事務局から

自然退会の扱いについて、前年度の会費を払ってなければ学会誌等の郵送を止める方針であることが確認された。

〈次回会議の予定〉

第 3 回常任理事会 10 月 5 日（金）時間未定 於 岡山大学

6 事務局より

事務局長 今田 匡彦

1) 第49回大会(岡山大会)について

web上での事前参加申込期限は平成30年9月6日(木), 入金期限は9月14日(金)です。期日までに支払いが確認できない場合, 登録取り消しとなりますので, 〈当日申込受付〉で改めて手続き, 支払いを行ってください。websiteは以下の通りです:

https://conv.toptour.co.jp/shop/evt/49ongaku_okayama/

総会の出欠について同封のハガキにご記入の上, 9月18日(火)必着でお知らせ下さい。

総会に欠席される方は, 必ず委任状に必要事項をご記入下さい。

2) 参加費は以下の通りです: 正会員・特別会員参加費: ¥4,000 (当日: ¥4,500)

懇親会費: ¥4,000

日替わり弁当(お茶付き): ¥1,000

3) 会員名簿について

今年度は新しい会員名簿の作成を予定しています。住所変更, 職場変更等がありましたら, 速やかに事務局までお知らせください。

4) 学会誌バックナンバー販売について

昨年度同様, 特別価格で販売中です。詳細は学会 website をご参照下さい。

----- 【編集後記】 -----

残暑お見舞い申し上げます。皆様のお手元に73号ニュースレターが届く頃も, まだ暑い日が続いていることと思います。本号が編集されている間にも, 日本各地では多くの災害が相次ぎました。特に, 大阪府北部地震, 平成30年7月豪雨は, 西日本を中心に甚大な被害をもたらしました。被災された方々, 被害にあわれた方々に心よりお見舞い申し上げます。

本号には, ISME世界大会に関する多くの玉稿が寄せられました。7月下旬のアゼルバイジャンの首都バクーで, 熱くも有意義な時間を共有された方々の想いのこもったご報告が印象的です。こうしたご報告の他にも, たくさんの充実した記事が満載のニュースレターとなりました。素敵な紙面にして頂きました執筆者の皆様, ご協力くださった皆様に感謝申し上げます。今後も, 国内外の学会・研究会の参加報告や情報, 新刊・近刊等紹介, ご意見・ご感想など, 皆様からのご投稿をお待ちしております。

本号が刊行されて暑さもおさまった頃には, 本学会の第49回大会が行われます。興味深い企画, 講演, 発表が数々予定されており, 暫定版のプログラムも既に発表されました。岡山で多くの方々とお目にかかることがありますこと, 広報委員一同, 心待ちしております。

(高見 仁志)

投稿先アドレス (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

【日本音楽教育学会事務局】

所在地: 〒184-0004 東京都小金井市本町5-38-10-206

TEL & FAX: 042-381-3562 E-mail: (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱: 〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱26 *郵便物は私書箱へ

開局日時: 月・水・木 9:00 ~ 15:00

事務局員: 亀山・若尾・宇田川